

協和工業 熱処理工場を新設

ステアア用が需要増

本社工場隣接地に 内製化で納期短縮も

ジョイント専門メーカーの協和工業（本社大府市横根町坊主山一ノ三二、鬼頭佑治社長、電話0562・47・1241）は、本社工場隣接地に、新たに「熱処理工場」を建設する。自動車用のステアリングジョイントの需要拡大に対応するのが狙い。現在、全量を外注している冷間鍛造の熱処理工程の一部を内製化し、リードタイムを短縮する。同社は冷間鍛造で独自の製法を確立しており「将来はすべてのジョイントを冷間鍛造で生産したい」（鬼頭佑治社長）考えだ。新工場の稼働は、今年秋ごろを目指している。

（大府・小島圭司）

熱処理工場の建設は、自動車メーカーの増産要求に対応するとともに、熱処理工程の内製化で、

同社独自の冷間鍛造技術のブラックボックス化も図りたい考えもある。生産量増加に伴い不安定に

なる品質管理を徹底し、他社との差別化を図っていき、先行投資的な意味合いが強いという。

新工場は一部二階建てで、延べ床面積七百五十六平方メートル。熱処理工程に近寄らずに作業ができるなど、安全な作業環境を設ける。投資額は用地を除いて三億円。

同社は国内メーカーとしては初めて冷間鍛造による自動車用ステアリングジョイントを開発し、自動車向けジョイントを量産化している。冷間鍛造のジョイントは剛性が高く操作感にも優れてい

ることから、トヨタ自動車の代表的車種のカローラやプリウスなどをはじめ、ホンダの看板車種のシビック、CRVなどにも採用され生産量が拡大している。

〇二年度には月産二十五万個を生産したが、〇六年度は月産五十万個を計画している。鬼頭社長は「高い品質を維持したまま、いかに安定供給してくかが欠かせない。今期は10%程度の売上高増加を目指したい」と話している。

同社は冷間鍛造を得意とするジョイント部品の

専門メーカー。ジョイントを、機械の性能を左右する重要な「機能部品」として位置付け、押しや引っ張り、曲げ、メンテナンスなどの機能を高

め、組み付け工数も減らすなど付加価値を最大限まで高めている。〇六年一月期売上高は二十五億円。



新工場を建設する協和工業本社（大府市横根町坊主山）